

# 中央アジアの弦楽器

坂井弘紀 さかいひろき / 和光大学

東洋と西洋を結びつける中央アジア。古来、多様で豊かな文化が栄えてきた地域である。そして、その音楽文化もヴァリエティに富んでいる。楽器の種類も実に多い。これからその一端を覗いてみることにしよう。

## 中央アジアの楽器

奈良の正倉院に残されている螺鈿紫檀五弦琵琶は中央アジアからやってきた楽器である。これは、敦煌の石窟にある壁画に描かれた楽器とほとんど同じ形であり、唯一現存するものである。だが日本では、中央アジアで現在も使われているよく似た楽器についてはほとんど知られていない。

私が最初に中央アジアを訪れたのは、ソビエト連邦が解体した年であったから、今から25年以上も前のことである。それ以来、様々な楽器が手元に集まった。ギターを弾き、集めていた私は自然とこの地の弦楽器を集めるようになっていたのである。コレクションが増えていったのは、それぞれに個性的な顔があり、

それらの顔に魅了されたせいでもあろうか。ギターと比べて一見シンプルでとっつきやすいが、巧みな奏法技術が要求されるため、なかなかうまく弾きこなせていないのが残念なところである。ここでは、それらの一部を紹介しながら、ユーラシア（テュルク）の音楽文化について簡単に述べてみたい。

## カザフの擦弦楽器

写真1は、カザフの伝統的の民族楽器コブズである（全長約65cm）。くりぬいた木の胴体にヤギの革を前面に張り、馬の毛の弦と弓で縦にもって弾く、チェロや胡弓のような擦弦楽器である。私が、カラカルバク（ウズベキスタンの少数民族）の語り手に見せてもらったコブズは二つ



写真1 カザフの擦弦楽器コブズ。27年前にカザフスタン、アルマトウで手に入れた。

に分解でき、持ち運びしやすいように工夫がされていた。父祖から受け継いだ、そのコブズは使い込まれ、渋く落ち着いた音色であったのを思い出す。

コブズは、かつてはシャマンが巫術で用いた楽器だ。中央アジアでは、イスラーム化が進むと、いわゆる「シャマニズム」は次第に衰退していったが、それでも完全に消え去ったのではなかった。シャマンは宗教的職能者から専門的な叙事詩語りへと徐々にその姿を変えていったのである。中央アジアでは詩人や叙事詩の語り手のことをバクス／バフシと呼ぶが、これはかつてシャマンを指す言葉であった。最初のシャマンはコルクトという人物であったとの伝承があるが、コルクトはまた、コブズの考案者ともいわれる。中央アジアのシル川に絨毯を浮かべて、コブズを奏でながら死とは何かを自問した。コルクトが「主役」の英雄叙事詩『デデ・コルクトの書』では、コブズ（コブズ）を弾くコルクトの姿が描かれる。もともと、19世紀になっても、シャマンがコブズを演奏しながら、巫術を行っていたことを伝える記録があり、シャマニズムと

クルグズの「世界遊牧競技大会」にてコムズを演奏する馬上の人。



アルマトウのコンサートでコブズを弾くアーティスト。



ドムブラを演奏する筆者。



写真2 クルグズの撥弦楽器コムズ。クルグズを代表する民族楽器。

写真3 カザフの撥弦楽器ドンブラ（左、中央）。写真左はカザフの代表的詩人アバイの生誕150年記念モデル。ウズベクのドンブラ（右）はウズベキスタンのプハラで購入したもの。

写真4 ウズベクのドゥタール（左）は長いネック（棒）が特徴的。トルクメンのドゥタール（右）は弦が金属で繊細な音を奏でる。

写真5 トルコの黒海地方のケメンチェ。



ウズベキスタンで、ソビエト時代に売られていたドゥタールの弦。

縁の深い楽器として注目される。コブズはもともと古いテュルク系の言葉で「楽器」を意味し、現在でもさまざまな楽器を表す。クルグズの三弦の撥弦楽器コムズも同系統の名称であろう（写真2、全長約88cm）。この言葉は「火不思」という表記で中国にも入り、弦楽器を意味した。のちに火不思が三絃へとつながり、中国から日本へ伝わり三味線になったとの説もある。

### カザフの撥弦楽器

ドンブラはカザフのもっともポピュラーな民族楽器である。カザフスタンのアルマトゥに住んでいたころ、友人たちから弾き方を教わり、共に歌ったことが今でも懐かしい。たった二本のガット弦（羊の腸。現在はナイロン製）を右手の指で弾き奏でるメロディは実に表情豊かで奥

深い。オール状の四角い胴体のタイプ（写真3左、全長約92cm）と梨状の丸いタイプ（中央、全長約95cm）の二種類が知られているが、丸いタイプが一般的である。四度音階、または五度音階で、下の弦（低音）を左手親指で、上の弦（高音）をその他の4本の指で握りこむようにして押さえる。ソ連解体・独立後のカザフスタンでは、カザフの民族文化の復興が盛んとなったが、ドンブラはその代表的なものである。客人を招いての宴にドンブラの伴奏による歌は欠かせないものであり、学校教育の音楽の授業でもドンブラが教授される。アルマトゥなど大都市の街角でも、ドンブラのケースを抱えた児童をしばしば見かけた。ドンブラは民謡の伴奏や器楽曲の演奏をはじめ、ポピュラーやロックといったジャンルにも用いられる、カザフのアイデンティティともっとも深く結びついた楽器である。

### ウズベキスタンの撥弦楽器

ウズベキスタンにもドンブラは普及している（写真3右、全長約90cm）。カザフのドンブラとは、細部において異なるが、やはり古くか

ら叙事詩語りなど、口承文芸に不可欠な楽器であった。ウズベキスタンの中でも、口承文芸が盛んであった南部地域にとくに広がっている。ウズベク・ドンブラは、カザフのドンブラよりもネックが太くフレットレスであり、アンズや桑の木をくり抜いた胴体は梨型でずしりとした印象を受ける。ウズベキスタン南部でその音色を聞いたときは、素朴な力強さを感じたものである。

ドゥタールは、中央アジアを代表する楽器の一つである。このドゥタール（写真4左、全長124cm）はウズベキスタンで購入したものであるが、ドゥタールはウズベクのみならず、トルクメン、ウイグル、カラカルバク、タジクなどの代表的な楽器である。トルクメンのドゥタールは、ウズベクのものよりも小ぶりである（写真4右、全長約90cm）。ペルシア語で「二本の弦」を意味するドゥタールは中央アジアや西アジアで広く使われる楽器で、どこかウズベク・ドンブラとも似た楽器であり、ドンブラと同系統の楽器とされる。カラカルバクの詩の語り手たちはドゥタールを弾きながら詩を吟じる。かつては、絹の弦が用いられて

いたが、現在ではナイロン弦が使われることが多い。

### ユーラシアをつなぐ楽器

最後に、中央アジアからは離れるが、トルコで購入した黒海地方のケメンチェ（写真5、全長50cm）を紹介したい。イスタンブールの楽器屋で、まずその異様な形状が目をついた。ご覧のように、この楽器はペグ（糸巻き）が胴体に直接付く形のネックのない擦弦楽器である。個性的な形状で、他の地域に類似する楽器をほとんどみないが、アイヌの弦楽器トンコリと驚くほどよく似ている。ユーラシア各地には、かつて同様の楽器が分布しており、それが黒海沿岸地方と極東地域において、現在まで残ったとの仮説があるが、先に見た「火不思」と同様に、日本からは縁遠いと感じられるユーラシア大陸の音楽文化は、日本とどこかでつながっているようである。近年では、日本で中央アジアの楽器が奏でられる機会もずいぶん増えた。この記事だけでは伝えきれない、中央アジアの音楽文化の豊かさをぜひ多くの人に、実際の音を通じて楽しんでいただきたいものである。